

# GRAZIA

“グラッツェ”

“グラッツェ”とはイタリア語で“ありがとう”の意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。



行ってみたい国はどこ？

## 国際コミュニケーション学科の 留学提携校の行き先

# 徹底比較

米国・英国・アイルランド・オーストラリア・ニュージーランド・カナダ  
さあ、あなたならどこを選ぶ？ 8の質問に答えます！



英語圏

**Q** 滞在費(学費含む)が一番高いのは、英国？

**A**  国際コミュニケーション学科が提携している学校限定という条件付きになりますが、滞在総費用で見ると、米国→カナダ→オーストラリア=ニュージーランド=アイルランド→英国の順に安くなっていきます。英国も物価は相応に高いと言えますが、米国が授業料が値が張るのに対し、英国は授業料が安いので、滞在費総額で見るとこの順番になります。

**Q** 日本人が少ないのはニュージーランド？

**A**  こちらも国際コミュニケーション学科の提携校に限ってのデータとなりますが、クラス総数に対し、日本人率が少ないのは、ニュージーランドのマッセイ大学と、米国のカリフォルニア州立大学サクラメント校です。米国は日本人留学生比率が多い国ですが、本学科提携校の中では、サクラメント校の日本人留学生数は少なめです。ニュージーランドも全体で見ればそれなりの日本人がいますが、もともと国の人口密度が低く(羊の数=人間の数の7倍)、国民がとてもフレンドリーなので、中高生でも安心して留学できる環境が整っています。

**Q** 様々な要素がバランスよく整っているのはカナダ？

**A**  大自然と大都市が隣接、英語も米英語と英国英語の間で聞き取りやすく、世界一暮らしやすい町がある国として、いつもランキング上位。街を構成する人種も、アジア、欧米、アラブ、アフリカと多岐に渡っているのも魅力。外食のバリエーションの多さもグルメにはうれしい限り。学校の質も粒が揃っています。ただし、その反面日本人が多いというデメリットも。初級クラス全員が日本人という可能性もなくはないのがカナダです。

**Q** オーストラリアに行くと、訛りのある英語になる？

**A**  もともとは英国アクセントを話す国。授業中の訛りはそれほど強くありません。もとより、昨今は英語自身が多種多様になってきているため、それほど気にする必要はないと思われます。留学生の受け入れ体制がきちんとシステム化されており、留学生の権利を守る法律まである国なので、枠組みに乗っかれる安心感があるのも特徴です。

**Q** 留学の王道は米国、穴場はアイルランドと 言うた人がいたけれど？

**A**  留学先選びは個人の趣味趣向があるので、個々人の性格を一度じっくり棚卸して選ぶのが一番です。一般論になりますが、文化、教育共に、米国から多大な影響を受けている日本にとって、みんなが憧れを持つのは世界の最先端をひた走る米国。または重厚な歴史と文化に浸りたいなら、正統派クイーンズイングリッシュを話す英国。日本から距離が遠いため日本人は多くないけれど、人々が温厚で人懐こく、かつ物価も普通、安心できる環境が整っているヨーロッパ圏を選ぶならアイルランド、といった見方ができなくもありません。

**Q** 滞在先を察にすると、ホームステイよりも 厳しいの？

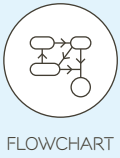
**A**  日本でイメージされる寮生活とは違い、全て自己責任に委ねられているところが多く、掃除や洗濯も自分のペース、門限もあります。逆にホームステイは、費用が安く抑えられる反面、オーストラリアなどではシャワーは10分、洗濯は週一回、門限は20時などとハウスルールが細かく決められています。

**Q** カナダの冬の体感温度はマイナス30度!?

**A**  トロントは特に寒いですが、バンクーバーも冬は雨が多いので、寒いのが苦手な人は、南半球の留学先(オーストラリアやニュージーランドなど)がお勧め。南半球は春夏秋冬が日本と逆なので、自分の出発時期と照らし合わせて、訪問先を決めると良いでしょう。

**Q** ニュージーランドは早口ってホント？

**A**  本当です。Kiwi Englishは早口だけでなく、口をあまり開かずにもゴモゴ話をする人も多く、初心者は聞き取りにくいと言われます。が、逆に言うと、このスピードの英語に慣れてしまえば、他の国での英語に対するリスニング力がアップします。



# 英語圏、あなたが似合う 留学先はどこ？



## START

- 気づけば、歴史文化を訪ねる散策をしていることがある
- カジュアルで自由な新しさがあるところをいつも探している

- 私は旧来のやり方を守ることにこだわる方だと思う
- いやむしろ最先端のものをすぐに取り入れる傾向がある

留学先を気候で決めるとしたら

- 寒い方が得意だ
- 暑い方が得意だ

- 友達からよく「せっかち」だと言われる
- 「のんびりしているね」と言われる

留学中には

- 近隣諸国をたくさん放してみたい
- 留学先の国の中を思い切り堪能したい

留学先選びの優先順位としては

- 人のフレンドリーさの方が大事
- 社会的な格式や伝統の方に惹かれる

- 丁寧な生活の中にあるほっこり感を大事にしたい派
- 刺激を求め、ビジネスにもアグレッシブになりたい派

留学先で

- 日本人の友達をたくさん作りたい
- ヨーロッパからのクラスメートと意見を戦わせたい

- 将来、留学したその国で働いてみたい
- とりあえず仕事はその国にこだわりはない

- 留学の仕組みはシステムチックになっている方がいい
- クラスは少人数編成で家庭的な方がいい



USA



AUSTRALIA



NEW ZEALAND



CANADA



UK



IRELAND



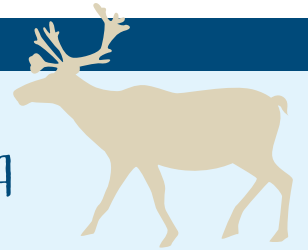
ANALYSIS

# 国の特徴を キーワード分析

※費用は情勢によって変動する可能性があります



CANADA  
カナダ



寒い、多文化、アラブ&アフリカ&南米含めた世界中からの留学生、移民大国→差別が少ない、フランス語、初心者にも聞き取りやすい英語(平均的な英語)、日本人が多い、日本との時差が13時間と大きい、語学教育が盛ん、協調性重視、大自然と大都市が共存、留学のシステムが整っている、山派、討論力。

費用 学費+ホームステイ/寮代+生活費  
32~45万/月



USA  
アメリカ



デジタル先進国、現代アートが盛ん、大都会、ハリウッド(エンタメの聖地)、世界標準、自由、自己主張、予算に余裕要、ワーホリ不可、(場所によっては)治安の懸念、勉強一本(就労不可)、ビジネス的感觉を磨ける、知名度の高い大学が多い、討論力要、白黒がハッキリしている、街によって全然雰囲気が違う→自分の好きなどころを選べる、多人種を認める空気感、食事がケミカル。

費用 学費+ホームステイ/寮代+生活費  
40~60万/月



UK  
イギリス

伝統的→クラシック、芸術、歴史、礼儀を重んじる、学校選択の幅あり、ヨーロッパからの留学生、高速鉄道で欧州ショートトリップ可→休暇に旅行に行ける、日本から遠い、食文化が単調、就労のハードルが高い、物価が高い、資金に余裕要、日本人が少ない、格式を重んじる、名門大学あり、文化的、美術館&博物館が無料。

費用 学費+ホームステイ/寮代+生活費  
38~53万/月



IRELAND  
アイルランド



ケルト文化、緑豊か、日本人ダントツで少ない、国民がおしゃべり好きで濃厚でフレンドリーな現地の人、物価が安め、休暇に欧州各国に旅行に行ける、日本から遠い、ヨーロッパからの留学生が多い、たくさんの絶景、山派向き、世界中から外資系企業が集まる、アクセスに乗り換え要。

費用 学費+ホームステイ/寮代+生活費  
35~45万/月



NEW ZEALAND  
ニュージーランド



大自然が豊か(スケールが大きい)、人間関係不得意な人向け、羊が多い、アクティブラーニング先進国、おおらかで濃厚&優しくフレンドリー、早口英語→リスニングが鍛えられる、個性を重視する教育、お財布に優しい、親子留学できるほど治安が良い、田舎感満載、アウトドアスポーツが盛ん、刺激は少ない、学校のクラスが少人数(8名程度)でアットホーム、マオリなど自国文化に対する誇りがある、アジア人が多い。

費用 学費+ホームステイ/寮代+生活費  
28~41万/月



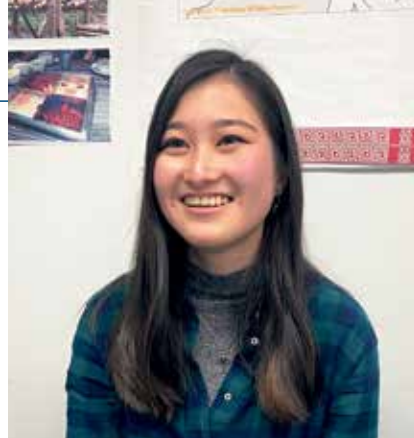
AUSTRALIA  
オーストラリア

留学がシステム化されている→受け入れに慣れている、就職が比較的簡単、ワーホリも簡単(ワーホリ大国)、時差があまりない、親日国家、アジア人が多い、学校の選択肢が多い、都市部の家賃が高い、奨学金制度が整っている、時給が高い、海派向き、天気がいい日が多い、治安がいい。

費用 学費+ホームステイ/寮代+生活費  
36~45万/月







INTERVIEW



# 米国・ルーマニア・台湾へ 留学を経験

さいが えれな  
雑賀 愛玲奈さん(4年生)

留学の  
エキスパートに  
聞く!



— 雑賀さんが海外に興味を持ったのは小さな頃からだったそうですね

雑賀 ● はい。親が米国好きということもあり、小さな頃から日常的に英語が耳に触れている環境でした。だから、中学の英語のテストでも、文法的な理由はよく分からないまま感覚的に回答を選んでいたところがあります。

— 英語の習得方法にも色々あると思うのですが、まず感覚的に掴み、あとで文法を学ぶのも、確かにありますね。高校の時もその英語熱は続いていましたか?

雑賀 ● 小学生の時からハリポッターにはまり、米国の映画やドラマも大好きだったので、高校3年生になった時に、文部科学省がやっている『トビタテ留学JAPAN』という奨学金制度に応募、カリフォルニアに3ヶ月留学しました。英語を話せるようになったなあと思ったのは、この時です。大好きなアーティストのサイン会に行けて、とても楽しかったです。



— そのまま米国の大学へ行かなかったんですか?

雑賀 ● 憧れはあったので、留学中に映像系に強い現地の大学のopen campusを訪ねました。キャンパスは広い、雰囲気はとにかくのびのびとしていて自由。規模感には本当に圧倒されました。結局米国の大学への進学は資金的にハードルが高かったため、日本に戻ってきましたが、米国の大学と日本のギャップが大き過ぎて、帰国後しばらく放心状態でした。

— 高校を卒業し、そのまま明星の国際コミュニケーション学科に入学されたんですね。

雑賀 ● とにかく海外へはたくさん行きたかったので、1年生の時には、イタリア&オランダのフィールドワークに参加、モデナ大学の学生たちと共同制作で、現地のプロモーションビデオを作りました。『日本の就活について』をテーマに、英語でプレゼンもしましたよ。そして米国留学中に仲良くなったヨーロッパ人の友達の影響もあり、2年生の後期には6ヶ月のルーマニアへの留学を決めました。

— 随分行動的ですね(笑) そして淡々と黙々と課題を消化していく姿勢がすごい。

雑賀 ● そうですか? (笑) 私にあまり「外国」とか「海外」に気負った感じがなかったかもしれません。驚いたことと言っても、工事期間中に電気がつかないとか、お湯が出ないとか、その程度。カザフスタンのルームメイトとも楽しくやっていました。ルーマニアのブラショフは日本からの留学生は、たぶん私一人だったと思います。移住許可証一枚を取るのにも1週間もかかってしまい、その時には日本のコンビニのコピーのありがたさを知りましたね。



— 現地での授業は英語で行われていたのですか?

雑賀 ● 英語とルーマニア語です。文化人類学、異文化研究、文学、現代美術の授業は英語で行われ、マーケティングやコミュニケーション授業はルーマニア語でした。

— 言葉が分からないままの授業って辛くなかったですか?

雑賀 ● 分からなくてもじっと聞いていれば、授業は終わるし(笑) そもそもトランシルヴァニア大学は日本よりも緩い(笑)。先生が授業に遅れたり、プレゼンもやたらダラダラしていたり。でも逆にいうと、その緩さが、いろんな国からの交換留学生たちとの交流を育むのに良かったのかもしれません。ルーマニアの学生はもとより、フランス、デンマーク、ドイツ、中国、モンゴルからやってきた学生たちとグループワーク。そこで環境問題について議論をできるのは面白かったです。この留学中に、書き英語の能力が身に付きました。

— トランシルヴァニア大学滞在中に、学科のフィールドワークにも現地参加したんですって?

雑賀 ● はい、ハンガリー&チェコのフィールドワークに、現地合流で参加しました。ヨーロッパ圏内、日本の国内を移動するような感覚です。



— 米国を知り、ヨーロッパを知った後の3年生、次は何をしたのかな?

雑賀 ● 学科事務室の職員さんに「欧米圏はたくさん見たから、次はアジアへいったら?」って声かけられたんです。なるほど、と思い、次は台湾です(笑)。3年生の後期6ヶ月間、台湾の世新大学へ行きました。ほとんどが英語での授業だったのですが、映画の授業だけは中国語。週4時間だけは意味がわからなくてちょっとつまづきました。留学生も、ポーランド、日本、ナイジェリア、チェコスロバキア、カザフスタン、ロシアなどなど。台湾は、食文化が日本と近いということもあり、馴染みやすかったです。いつも屋台でご飯を食べていました。

— 生活者視点でいろんな文化圏を見てこられたわけですが、これから先の展望を聞かせてください。

雑賀 ● 日本では『みんな一緒が大切』『大学はサークルで遊びそのまま就職』が普通ですが、世界は違う。それを知った今、できるなら外を目指したいと思っています。米国も憧れてはいましたが、やはり銃社会、そして案外差別社会。だから好きだけれど住めるかと思ったら、難しい。となると、ヨーロッパかな。ドイツ圏の考え方は理知的でフェアだし、フランスには映像に特化したメディア系大学院があるので、そちらでもっと学んでみたいと思っています。



— これから留学する後輩たちに向けて、一言お願いします。

雑賀 ● 出国前に日本をたくさん勉強しておいてください。いったん外に出れば、「日本」を背負った個人。自分の国についているんな説明ができた方がいい。そして留学した先で、知り合う相手を色眼鏡で見ないこと。結局、国ってあんまり関係ないんです。アジア人だから、欧米人だからという枠を取っ払って人間関係を構築した方が、中味の濃いよい関係ができます。で、留学先で彼らから何かを誘われたら、多少面倒でも「Yes!」。自分からも積極的に相手を誘う。それで留学生活は必ず楽しくなります。

— そうそう、その前に。みなさん学科を通じて認定交換留学をしたければ、ちゃんと授業に出て、留学に必要な成績をまず確保しましょうね!